

地域日本語シンポジウム・横浜 まちの日本語プラットフォーム 2021

居場所におけるコミュニケーション
～共にある場で紡がれる、ことばと関係性～

実施報告書

2022年3月

公益財団法人横浜市国際交流協会 (YOKE)

～まちの日本語プラットフォームとは～

外国出身や外国につながる方たちの増加・定住化が進み、学校や職場、生活の場など、日常の暮らしで多文化を背景にした様々なコミュニケーションが行われています。YOKEでは、多様な人々が活躍できる地域づくりにむけ、日本人、外国人、活動分野の異なる人たちが行き交い、さらなる行動のきっかけを得られることを目指し、2017年にトークイベント「まちのほんごプラットフォーム」を実施しました。

そして2020年8月に横浜市域における地域日本語教育の総合的な体制づくりを進めるための拠点「よこはま日本語学習支援センター」の開設を機に、「地域日本語シンポジウム・まちの日本語プラットフォーム2020」を開催し、横浜での多様なコミュニケーションのありようを、現場から学びました。センター開設2年目の2021年度は、「居場所」におけるコミュニケーションを共に考える機会としました。

概要

■日時：2022年2月19日（土）10:00-12:00

※12:00-12:30 参加者同士の交流タイム（自由参加）

■場所：オンライン（Zoom）

■参加者：135人、交流タイム 46人 ※登壇者、スタッフを含む

■プログラム：

シンポジウム 10:00-12:00

（1）コーディネーターからの趣旨説明

嶽肩志江（たけがた・ゆきえ）さん

横浜国立大学教育学部非常勤講師

横浜市地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業プログラムアドバイザー

（2）登壇者報告

報告1 「ライフステージと居場所・コミュニケーション」

福德未来（ふくとく・みき）さん

鶴見国際交流ラウンジ・外国人親子カンガルーサロン コーディネーター

NPO法人サードプレイス/230cafe

報告2 「居場所をつくる、ことばの力～つづき MY プラザの取組より～」

林田育美（はやしだ・いくみ）さん

都筑多文化青少年・交流プラザ（つづき MY プラザ）館長

報告3 「誰もが気軽に立ち寄り、つながり、そして・・・」

中 和子（なか・かずこ）さん

ともしびカフェポエム'10/ユッカの会 代表

(3) パネルディスカッション・質疑・コメント

- ・コメンテーター自己紹介、コメント

石井正宏 (いしい・まさひろ) さん NPO 法人パノラマ 理事長

- ・ディスカッション

多文化共生の豊かな“居場所”づくりに向けたディスカッション

- ・質疑応答

○参加者同士の交流タイム (自由参加) 12:00-12:30

小グループでの交流、感想の共有参加者同士の交流

- ・自己紹介、感想の共有

■主 催：公益財団法人横浜市国際交流協会

■その他：横浜市委託事業 文化庁令和3年度「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」活用

【広報チラシ】

横浜 まちな日本語プラットフォーム **参加無料** **オンライン**

居場所におけるコミュニケーション
~共にある場で紡がれる、ことばと関係性~

みなさんには、家庭や学校、職場以外の大切な場所、
サード・プレイス（第三の場）はありますか？
このシンポジウムでは、サード・プレイスとしての居場所における
日本語コミュニケーションをテーマに取り上げ、
多文化共生に向けて横須で居場所づくりを取り組む方たちの実践を伺います。
子どもから大人まで、ライフステージの様々な段階で
居場所が果たす役割について、一緒に考えませんか？

2022年2月19日(土) 10:00 ~ 12:00
*12:00 ~ 12:30 参加者同士の交流タイムがあります。(自由参加)

場所 オンライン (Zoom)

対象 テーマに関心のある方などなても **定員** 150人 (先着順)

登壇者
榎尾 志江さん (横浜国立大学教育学部非常勤講師)
福徳 未来さん (横浜国際交流ラウンジ・外国人親子カンガルーサロン コーディネーター)
林田 育美さん (横浜多文化・青少年交流プラザ (つづき MY プラザ) 館長)
中一和子さん (ともしひカフェボトム10)
石井 正宏さん (NPO 法人パノラマ 理事長)

申込 <https://ws.formzu.net/fgen/S15388714/>
お預かりする個人情報は、このシンポジウムに関する連絡のみ使用します。

主催 公益財団法人 横浜市国際交流協会 (YOKE) (よこはま日本語学習支援センター)
045-222-1173 c-nihongo@yoke.or.jp
よこはま日本語学習支援センター
Yokohama Nihongo Support Center
横浜市国際交流 文化庁令和3年度 「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」 活用

スケジュール

シンポジウム 居場所におけるコミュニケーション～共にある場で紡がれる、ことばと関係性～

コーディネーターからの書籍説明
登壇者紹介

司会 福徳 未来 (ふくとく・みずき) さん
第1部 ライフステージと居場所・コミュニケーション (福徳 未来さん)
第2部 居場所をつくる、ことばの力
第3部 へつづき MY プラザの取組より～ (林田 育美さん)
第4部 誰もが気軽に立ち寄り、つながり、そして… (中一和子さん)
パネルディスカッションと質疑応答
多文化共生の居場所づくりに向けたディスカッションを、コメンテーターも交え行います。

※交流タイム 12:00-12:30 (自由参加)
参加者同士の交流タイムがあります。

登壇者 (登壇順)

司会者 福徳 未来 (ふくとく・みずき) さん
横浜国際交流ラウンジ・外国人親子カンガルーサロン
コーディネーター
NPO 法人サードプレイス/230cafe
◆プロフィール
日本語の不自由さや情報不足から子育てに迷惘を抱える外国人が多いことを知り、2012年より、外国人親子カンガルーサロンに立ち上げられた。
また、日本語能力に関わらず、日本人とのコミュニケーションや地域参加の機会に乏しい現状を知り、日本の中により多くの多文化・多世代の拠点を作りたいという思いから、地域活動で出会った仲間と共にコーディネーターを募集、地域のつながりづくりや挑戦を応援する場づくりに取り組んでいる。

第1部 榎尾 志江 (えのすゑ) さん
横浜国立大学教育学部非常勤講師
横浜国際交流ラウンジ・外国人親子カンガルーサロン
コーディネーター
横浜多文化・青少年交流プラザ (つづき MY プラザ) 館長
◆プロフィール
専攻は日本語教育 (第二言語習得、年少者日本語教育、地域日本語教育)、1990年代企業に勤め、後、日本語教育の世界へ。台湾、国内の大学で日本語教育、日本語教師養成を担当。
日本語教育に関わり始めた頃から地域のボランティア日本語教育や公立学校で外国につながる子ども・大人への日本語、異文化理解支援に関わっている。こうした活動を通して、日本、海外において複数国籍で育つ子どもやその家庭にとってのことばの役割について考えている。

第2部 林田 育美 (はやしだ・いくみ) さん
横浜多文化・青少年交流プラザ (つづき MY プラザ) 館長
◆プロフィール
平成19年(2007年)11月の横浜多文化・青少年交流プラザ (つづき MY プラザ) 開設以来、横浜地区における国際交流・外国人生活の拠点 (国際交流ラウンジ) と、中高生世代を中心とする青少年の地域活動拠点という、二つの異なる機能を併せ持つ施設を運営している。
その運営を担いながら、外国につながる子どもたちや家族を支援し、学校や地域機関との連携を図りながら、居場所づくり事業に取り組んでいる。

第3部 中一和子 (なか・かずこ) さん
ともしひカフェボトム10
ユウカの会 代表
◆プロフィール
中国残留帰国帰省者家族など外国につながる人々の教科書習、日本語学習、交流会、生活上の困難や、進学・就職の相談などを行う「ユウカの会」の代表。
いつも開業を見つめながらとも学び、ともに楽しむ気持ちで大切に赤ちゃんからお年寄りまで、多世代、多文化をキーワードに30年余、2010年日本語教師のボランティアやボランティア、地域の活用協議会、青少年指導員等多分野な方々と、ともしひカフェボトム10を設立、地域での共生の在り方を模索している。

コメンテーター 石井 正宏 (いしい・まさひろ) さん
NPO 法人パノラマ 理事長
◆プロフィール
ひそひそと事業の運営支援から、社会的孤立の予防支援に取り組むため平成26年にNPO法人パノラマを設立し、中途半端な決定を予防するために横浜市内の幼稚園・小中学校の校内居場所カフェ等の改善を行う。
平成25年度内閣府「国際を有する子ども・高齢及びその他国際に対する支援の在り方に関する調査研究」企画分析委員、令和2年度厚生労働省生活動着自立支援制度人材養成研修「ひそひそ状態にある者への支援」研修講師。

主催 公益財団法人 横浜市国際交流協会 (YOKE) (よこはま日本語学習支援センター)
045-222-1173 c-nihongo@yoke.or.jp
よこはま日本語学習支援センター
Yokohama Nihongo Support Center
横浜市国際交流 文化庁令和3年度 「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」 活用

シンポジウム

「居場所におけるコミュニケーション～共にある場で紡がれる、ことばと関係性～」

未就学の親子、学生、高齢期の方々と様々な世代の居場所づくりに取り組む3団体より、活動内容やそれぞれの場での日本語コミュニケーションについてご紹介いただきました。

●趣旨説明

嶽肩 志江さん 横浜国立大学教育学部非常勤講師
横浜市地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業プログラムアドバイザー

シンポジウム開催にあたりコーディネーターの嶽肩志江さんから、居場所にあることばが外国語であった場合どのような壁があり、どのようにその壁を下げられるのか言語習得の観点からお話しいただきました。各登壇者の活動場所での「ことばの使いよう」について注目していきます。



居場所とは何か。レイ・オルデンバーク「サードプレイス コミュニティの核になる『とびきり居心地よい場所』」(みすず書房、2013年)では、「居場所」について、「インフォーマルな公共生活とそれに不可欠な『とびきり居心地のよい場所』」「地域社会にあるかもしれない楽しい集いの場」などと書かれています。人が集まるとコミュニケーションが生じ、そのツールとして言葉が使われますが、ことばは時に心理的不安を煽ることがあります。特に

外国語を話す際には、言いたいことが言えないなど言語の習得に関わる不安や心配、うまく伝えられないので教養がないように見られるなどのもどかしさや恥ずかしさ、緊張や焦りがあり、これらは「第二言語不安」と言われるものです。

ここに目を付けたのがアメリカの学者スティーブン・D・クラッシュェンとトレイシー・テレル(『The natural approach: Language acquisition in the classroom』Alemany Press、1983年)であり、「ナチュラル・アプローチ」という教授法を提唱しました。心理的な障壁が低い状態でなければことばの習得は進まないとの考えから、特に初期の学習者には発話を強要させず聞くことに集中させました。「質問は yes・no で答えられるものから始める」、「完璧でなくていいので発表してよいのだということを通認認識とする」、「心地よい環境で適度なリスクを伴う活動に参加してみる」、「リラックスのツールとして音楽、笑い、ゲームなどを取り入れる」のように徐々に自分のことばで言えるようにしていくことで、教室内で成功体験を積み自信を持たせていきます。この中に「居場所をとびきり居心地よい場所」にするヒントが隠されているように思います。

居場所を作るには、ことばの使いように配慮が必要だと考えますが、3人の事例と石井さんのコメントを聞くにあたり、「居場所」において、ことばがどのように作用するのか、その場にいる人達の役割とは?などに注目していきたいと思えます。



■登壇者報告

【報告1】「ライフステージと居場所・コミュニケーション」

福德 未来さん 鶴見国際交流ラウンジ・外国人親子カンガルーサロン コーディネーター
NPO 法人サードプレイス / 230cafe

就学前の親子に向けた活動をされている福德さんに、日本での子育ての状況や国との違い、活動の中で大切にされていることをお話いただきました。

●カンガルーサロンについて

就学前の親子のサポートをしています。背景には、言葉の壁や情報不足で孤立しがちだったり、子どもが小さく勉強の機会が限られるということがあります。横浜市から子育てをテーマにした日本語教室が必要と聞き試験的に事業を立ち上げたこと、小児科や乳幼児健診で困っている外国人を見かけたことなどがきっかけとなり活動が始まりました。



●活動内容

就学前の親子が地域に出るきっかけになるよう、情報や日本語学習機会を提供しています。保護者向けには、文法積み上げではなく、「病院へ行く」、「防災」などをテーマとして取り上げ、教室を出たら使えることを意識しています。子ども向けには、手遊びや読み聞かせを通じて日本語に触れられるようにしています。また、地域の情報を伝えるプログラムも組んでおり、子育て情報は多言語で伝えています。

子ども

- 保育ボランティア・スタッフと遊びながら様々な体験
- あそびの中で社会性をはぐくむ
- 順番・お片付けなど

手遊びうた・よみきかせ

- シンプル、動きながら日本語の導入にもなる歌
ex.「あたま・かた・ひざ・ぼん」「むすんでひらいて」「とん・とん・とん・ひげいさん」
- 参加型紙芝居、絵本
ex.「みんなでボン！」「びよーん」
- “実物”も用いて子どもを引き込む。
- オノマトペ

↓

- 絵本・紙芝居が始まる → 聞く姿勢
- 歌が始まる → 周りを見て真似する
- 言葉を繰り返す
- 子どもの反応を見て嬉しそうに、保護者も携帯で録画する人も

子ども

- 保育ボランティア・スタッフと遊びながら様々な体験
- あそびの中で社会性をはぐくむ
- 順番・お片付けなど

●子育てや子どもの成長における様々な困りごと

「ママ友との会話の終わり方が分からない・・・」 「『様子を見ましょう』って何？」
「乳幼児健診でうまく受け答えができずに発達の違いを指摘されることがある」
「学校で『トイレに行きたい』と言えず、教室で漏らしてしまう」
「子どもの様子が分からない」・・・小学校になると連絡帳のやりとりが減り、勉強や友達付き合いの様子が分からない。
「上の子は中国で祖父母が見て、下の子は日本で両親と暮らしている。文化的な背景からであるが、育児放棄のように誤解する人がいる」

◇日本人保護者や園の職員さんからの声

「外国語が分からないから話しかけてよいものか」（日本人保護者）

「子どもは遊ぶうちにコミュニケーションが取れるが、保護者とのコミュニケーションの方が大変」（園職員）

気を付けていること、大切にしていることは「『当たり前』に自覚的になること」です。日本と外国では子育ての常識が違うので、良し悪しではなく相手を尊重するようにしています。「自然分娩がよく帝王切開は楽と姑に言われた」など、日本人は固定概念に縛られていることがあると思います。

次に「当事者感覚」を持つことです。子育ての情報は10年経てば違うので、常に周囲の話を聞きながら新しい情報を出せるようにしています。日本人が支援する側とは限らず、子育て中の親子の困りどころが分かるのは当事者なので、通訳をしてもらったり、子育てに関する情報や話題提供をしてもらったりなど支援側に回ってもらうこともあります。学習者が先生になり文化を紹介したり、子どもを任せたりして、役割を感じてもらえるようにしています。

●コミュニティカフェとしての場づくり

日本語のレベルや文化の違いに関わらず受け止めてもらえる場となるようにとの思いで230カフェというコミュニティカフェ運営もしています。また、生活はサロンの外なので、日ごろの接点を地域に増やしたいと考えています。

今後は、母子保健や子育て支援に関わる方々との接点を増やし、外国の子育てや異文化の戸惑いなどを発信していく機会をつくりたいです。

【報告2】 「居場所をつくる、ことばの力～つづき MY プラザの取組より～」

林田育美さん／都筑多文化・青少年交流プラザ（つづき MY プラザ） 館長

つづき MY プラザでは、毎年異年齢の子どもたちが集い、地域に入ってボランティア活動をしています。そこで子ども達がどんなことを感じているのか、子どもたちのことばと共にご紹介いただきました。

●つづき MY プラザについて

都筑区の公共施設で国際交流ラウンジ、青少年の地域活動拠点という2つの異なる機能を合わせ持っています。2つがつながるものとして、外国につながる子どもたちの支援に力を入れています。



●異年齢が集うボランティア体験

この取組「はあと de ボランティア」は、都筑区社会福祉協議会、都筑区青少年指導員連絡協議会、つづき MY プラザの三者が主催で行っています。重要なことは、「常に地域を意識すること」「ネットワークをつくり、受け入れ先をつくり、青少年が地域にでていくきっかけをつくること」です。

◇「中高生のための夏休みボランティア体験」プログラム紹介

対象：小学校5年～高校3年生 / 2021年度参加者：75校310人（個人参加）

【STEP1】オリエンテーション

小学生から高校生までの8学年が学校・学年関係なく、初対面でボランティアについて話し合う。参加者から「緊張しているのは私だけでなかった」「こんなに多くの人がボランティアするんだ、びっくり」などの言葉が出てくるように、この世代にとって、異文化や異世代の人との交流は初めての体験。

【STEP2】ボランティア体験

※コロナ前の活動場所は約130か所。

保育園、川の清掃、1時間だけ、2週間など、行く先も時間もばらばら。

【STEP3】振り返り&修了証授与

同じ分野（活動）でつくったチームで話し合い、活動を振り返る。

「小さい子と目線を合わせようと思っていたが、実際には自分から話しかけないと、話せないことがわかった。」

「お世話になった人への恩返しや人との関わりを望み参加した。つながりができ、新しいことを知った。」



●夏休みだけでなく1年を通して活動ができる、新たなプログラムを作りました。

◇「SET UPプログラム」

<参加したメンバーの声>

「大人と話せなかった」「楽しませるのが難しかった」（辛いことも言葉にできるのはすごいこと）

「違う年代と話し、価値観が広がった」「協力する大切さを知った」

「ボランティアを重く考えすぎない。参加するだけで気持ちは伝わる」

（地域の方から）「中高生と一緒に考える楽しさに気がついた」「毎日ありがとう」

ボランティア体験をはじめプログラム全体を通して、つづき MY プラザの中で、また居場所づくりの施設内など、様々な場所で出会いがあります。検温時にスタッフとされた高校生が立ち話をする様子、日本語ボランティアと学習者が学び合う様子、これらは居場所の中で出会う1コマです。コロナ前は毎年12月に日本語学習発表会を開催して、大人、子ども、家族、ボランティアが交流を楽しんでいましたが、そこで話される言語はさまざまです。

●きっかけという名のバトン

青少年事業の中にも、外国につながる子どもの支援の中にも、居場所には必ずことばがあります。子ども達はたくさんの「地域の人たち」と、たくさんの「ことば」に支えられて次の一步を踏み出します。子ども達が力強く生き抜けるように、体験を通して考え想像するための「きっかけという名のバトン」を渡すことが大人にできることかもしれません。そこに国籍の違いはありません。

つづき MY プラザの中には、たくさんのことばが溢れていて、聞くだけでもかまわないと思います。ことばと共に生きた居場所が作られます。



（日本語学習発表会に参加した子ども達と家族、ボランティア）

【報告3】「誰もが気軽に立ち寄り、つながり、そして・・・」

中 和子さん ともしびカフェポエム'10/ユッカの会 代表

ユッカの会では長きにわたり中国残留邦人や外国の方々が集い、話せる場を作り続けてきました。これまでの活動や「ともしびカフェポエム'10」開店の経緯やその思いについてもお話しいただきました。

●ユッカの会について

1985年に、沼波万里子（ぬなみまりこ）さんが中国残留邦人と一緒に帰国した2世の学習支援を始め、この活動が会の前身となっています。その後日本語教室、パソコン教室などの教室事業と多くの交流事業を実施しています。中国残留邦人1世対象の中国残留邦人しゃべり場は2002年に当事者の要望で始まりました。平塚、川崎、相模原、横須賀からも通ってきています。



【活動内容】

学習者：246人（中国残留邦人が90人。

国・地域は中国が50%、その他ベトナム、フィリピン、インドなど）

ボランティア：174人

日常活動：学校の補習、日本語、パソコンの教室が週1回。

交流活動：春節を祝う会、世界の家庭料理、自転車の乗り方、消火器の扱い方など生活に密着した活動、多文化交流キャンプ、小学校に入学する子の保護者を対象とした教室など

●耳を澄ますと聞こえてくること

1980年代、外国につながる保護者は、日本語習得の困難さ、社会的適応の苦勞、子どもの教育などについて日本語学習の際に話してくれました。2010年代に入ると加齢と病気、独居の寂しさ、配偶者の介護など、2020年になると高齢期の生活と終活、介護利用など新しい課題が見えてきました。

私達は生活情報を提供してきましたが、必要な情報を得て理解するのは日本人でも難しいことです。ことば、情報、制度、文化などいろいろな壁の中で生活をしていくためには、やさしい日本語でのコミュニケーションが大事だと考え、やさしい日本語での情報提供に取り組んでいます。

●教室の役割、行政との連携

外国人に対する日本語教育を保障するという内容の「日本語教育の推進に関する法律」が2019年6月に施行されました。例えば地方公共団体については「地域の状況に応じた日本語教育の推進に必要な施策の実施に努める」とされており、神奈川県では日本語を初めて学ぶ人、日本語が分からない人のための「はじめてのにほんご」を開催しています。

2020年8月には、国による「在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン」ができました。地域のボランティア教室の役割、行政との連携などを考える時期にきていると思います。

●ともしびカフェポエム'10を開店

神奈川県や、県内で活動する複数の団体で構成されるあーすフェスタ実行委員会が主催し、神奈川県立地球市民かながわプラザ・横浜市栄区民文化センターで開催された「あーすフェスタかながわ2018」では、中国残留邦人がメニューなどを作成して手作りの餃子や肉まんを販売し、あっという間に売り切れ

ました。イベントは日本人も楽しんで参加してくれますが、地域の中では外国語が話せない、声かけが難しいなどの戸惑いがあるようでした。そこで、「テーブルを囲んで一緒に学ぼう、つくろう、お茶しよう」とユッカの会のボランティア、学習習者、帰国者1世、民生委員、青少年指導員などに声かけをし、ともしびカフェポエム'10を2010年10月10日、神奈川県立地球市民かながわプラザ（あーすぶらざ）に開店しました。

外国の方々と地域の間にはまだ大きな川があります。橋を渡るのが大変だと思う人たちがポエムに集い交流し、やさしい日本語が地域に飛び火し広がっていくことを願っています。また、ポエムでは母語でのおしゃべりの時間も大切にしています。外国の方々が安心して自信を持って自由な気持ちでいられる場でありたいです。

●居場所には、やさしい日本語を

しゃべり場に参加する中国残留邦人の平均年齢は79歳です。オンライン会議ができるよう希望者の家庭訪問をし、結果週1回20名程がオンラインで日本語教室に参加しています。話すこと、人と出会うことはコロナ禍では本当に大切なことだと思うので、様々な場で対話を続けたいです。スピーチ会には相模原市内から参加の方もいて、皆さん日本語で会話をしたい、と高齢になっても努力しています。

子どもたちが集まる「ひろば」は毎週水曜日夕方に開催しています。中国人の大学生が来て子どもたちは喜んでいきます。食料支援も行っており、子どもたちも積極的にお手伝いをしてくれます。

「誰もが気軽に立ち寄り、つながり、そしてそこにはやさしい日本語を」という思いでお話しました。



パネルディスカッション

「多文化共生の豊かな『居場所』づくり」

登壇者の報告を受け、コメンテーター石井正宏さんより「居場所」とはどんな場所なのか、ご自身の「居場所」に関わる事業の紹介や発表へのコメントを交えながら、お話しいただきました。

●自己紹介／事例報告へのコメント

コメンテーター 石井正宏さん／NPO法人パノラマ理事長

◇ パノラマの活動「居場所にこだわった仕事」について

2000年から引きこもりの若者支援をしており、高校で居場所カフェの取組をしています。オンライン上での居場所居酒屋「汽水」、サード・プレイス提供事業を行っており、今年の春からは小中学生に居場所の提供をしていく予定です。居場所にこだわって仕事をしています。

学校はセカンド・プレイス、そこに突如現れたサード・プレイスというコンセプトで神奈川県立田奈高校「びっくりカフェ」を毎週木曜の放課後に開催しています。皆さんの話を聞いて、教室と居場所の違いを改めて考え、それを意識して運営していることに気づきました。福德さんの話に「当たり前になる」とありました。自分に当たり前の芯がないと違和感に気づけません。「こういうことがで



きないんだ」「こんなことしちゃうんだ」など、「あれ？」という気づきや違和感に評価的にならないことが居場所的なのだと思います。違和感の積み重ねがアセスメント（※1）であり、支援につながっていくのだと思います。

※1 客観的に評価、分析すること

◇ 発表者へのコメント

活動の場に子どもが居ることは面白く、カフェのボランティアにも「積極的に子どもを連れて来て」と言っています。子どもは「ソーシャルボンド」、人と人を繋げる接着剤となります。カンガルーサロンでも、異文化の子どもたちが先に仲良くなり、それからお母さんたちが話し始めるのでしょうか。林田さんの話も興味深かったです。若者支援の現場にいますと、他県へ若者が流出し過疎化が進むので、残ってもらうというのが死活問題になっています。地元愛で、ここで子育てをしたいというような思いが積み重なればよいのでしょうか。また、8学年がいる異年齢コミュニケーションで、多様なロールモデルに出会う機会になっていると思います。

ファースト・プレイスは家で、ここでの役割は親と子、セカンド・プレイスでの役割は先生と生徒など固定しています。サード・プレイスは役割が固定化されていません。支える側の人を支えられる側に回るとか、役割がシャッフルされることが居場所の醍醐味です。そこに集う人の成長があると思います。普段はお世話される側の子も、自分より下の子が居ることで無理やり上の子として役割をさせられます。このシャッフルを経験できるのは居場所ならではのことで、シャッフルを居場所にどうデザインしておくかが大事なことです。

◇ 居場所を減ぼす「さんがり屋」

「知りたがり屋、関わりたがり屋、教えたがり屋」がいるとシャッフルが起こらず、サード・プレイスが突然セカンド・プレイス化してしまいます。居場所の中でイベントをするときに、ハードルをどこに置くのか？下の子に合わせると上の子は、つまらない。引きこもりの居場所では、発達障害や知的な課題を持つ子もいますがその子たちに合わせると、場がいびつになります。林田さんたちは、丁度いいハードルの設定をしているのだと思いました。「難しかった」という感想は大事なことで、全員がクリアできるものにしていないのが素敵だと思いました。

「イベントに参加しない自由」、「傍観者がいてもいい」、これは居場所的なスタンスです。中さんの話は「共に、一緒に」という言葉が多くほっこりしました。校内カフェでは、ボランティアが上げ膳据え膳で高校生をもてなしてしまうことがあります。フラットな役割分担は居場所として大事です。ともしびカフェポエム'10の活動も社会的孤立の予防に貢献していると思います。壁が塞がれて、最終的に孤立する前に、壁の内です所属を失わないための支援が実現しつつ、壁を越えるチャレンジがあり、とてもよいと思いました。コロナが明けたら、餃子と肉まんの行列に並びたいです。

79歳の皆さんがブレイクアウトルーム（※2）を使いこなして日本語を勉強しているのを聞いて、自分のスキルが足りないと反省しました。コミュニケーションの枯渇状態がコロナ禍で起きています。何とかして人とのつながりを維持したいという思いを持っているのでしょうか。

※2 オンライン会議サービス「Zoom」のミーティング内で、少人数グループに分かれて話すことができる機能

居場所とはどんな場所でしょうか。昔は「フリースペース」と言っており、「フリー」の意味を説明すると居場所がみえてきます。

居場所のフリーとは

- ・いつ来ていつ帰ってもいいフリー：予約が不要、自由が保障されている。
- ・他人のペースに合わせなくてもいいフリー：傍観者でもいられる。
- ・誰とも喋らなくていい関わり方のフリー：1人での自由が保障されている。傍観者でいる間に、いろいろいる大人から話しやすい人を見つけてもよい。（大人オーディションと言っている）
- ・強制的に何かに参加させられないフリー：「嫌だ」と言っても大丈夫。
- ・価値観を押しつけられないフリー：「若者だから夢を持って」など、価値観を押しつけない。

● パネルディスカッション

登壇者報告や石井さんのお話から、いくつか共通のキーワードが見えてきました。コーディネーター嶽肩さんの進行により、皆で更にその言葉について意見交換をし、また、参加者からのチャットコメントも紹介しつつ、話を深めていきました。

(氏名敬称省略)

▶ 子どもの役割や、異世代のコミュニケーションについて



嶽肩

「子どもの存在、役割」「異年齢間のコミュニケーション」「高齢者から小中学生など、異年齢が集まる効果」について掘り下げてみたいと思います。小さい子どもは重要なつなぎ役を自然に演じてくれているようですね。福德さん、いかがですか？

小学校が休みの日にカンガルーサロンに兄・姉を連れてくる参加者が多いです。かれらは保護者の日本語学習の際には、ロールプレイの相手として活躍してくれ、また幼児の遊び相手にもなってくれます。それを見て「面倒見がいいね」と話が始まったり、スタッフと兄・姉のやり取りも始まります。サロンでは、そこに居る人に何でもお願いするので、彼らは居心地良く感じてくれているのかどうか？保護者が上の子を連れてくることの罪悪感も軽減されるといいと思っています。



福德



嶽肩

そこで「役割のシャッフル」が起きるわけですね。つづき MY プラザのイベントでも（役割のシャッフルが）起きていたのでは？

学校も違う8学年が一緒というのは、若い世代には厳しいと思いますし、非日常なことです。私立と公立でも違うので、一緒になる難しさはあります。個人で参加し継続することは、影響されるものを子どもが感じ取っているからでしょう。口が重い子にはその場にいるだけでいいと伝えています。その中から子どもが吸収し子どもに変化が起こるチェンジが起きる場面があり、それを見た大人も刺激を受けます。大人にとっても非日常で、子どもたちの変化を楽しんでいます。



林田



石井

私のところでも「浴衣パーティー」といった文化体験をやっています。（浴衣を）着たことがない子が多く、地域から着付けをしてくれる人が十数名ボランティアで来ています。浴衣姿の子どもたちを見る大人の眼差しが優しく、笑顔に溢れています。日本は疲弊していると言われますが、子ども達の支援を厚くすれば、大人たちは元気になります。そのような循環ができるといいです。



嶽肩

昨日石井さんの居場所カフェにおじゃまして、とても楽しかったです。高校生にゲームのやり方を教わったら、すごく優しく、初めて参加した私を慮ってくれました。それでこちらも元気をもらいます。その好循環が、場到人（ボランティアや子ども）を定着させるように思います。大事なポイントの1つだと思います。ユッカの会も幅広い世代の参加者が、長く関わっていますね。どうですか？

ともしびカフェポエムもサード・プレイスですが、「ひろば」も、何もしなくていい場、やりたいことができる場として、コロナ禍で良い場所となっています。そこには高齢者も参加しており、子どもと一緒に楽しいということです。大学生が小学生と一緒に何かするのも楽しいようです。小学生も大学生が大好きです。



中



大学生には、おじさん、おばさんにはない魅力があります。
「ひろば」では、必ずご飯を食べますね？

嶽肩

学習支援に参加している中の1人が毎回お腹をすかせていました。その状態が2年ほど続きましたが、頻繁に他でも空腹の子がいるという話が入るようになりました。食事は大事なことなので、カフェで「ひろば」という子ども食堂・だれでも食堂的な活動を始めました。寄付してくれる人もいます。去年は3回、必要な方に食料をお送りしました。今年も寄付に助けられながら続けたいです。子どもと接する中でわかってきたことですが、ひとり親家庭の子どもから食料支援の必要があるといった声が聞こえてきます。



中

▶ コロナ禍での活動の難しさや制限の中での工夫、また、コロナ禍だからこそその気付きについて



嶽肩

コロナ禍で制約がある中で、みなさんにご苦労があったことと思います。チャットに寄せられた質問から、コロナ禍では今までにない悩みを持ったり、孤独になった人もいるかもしれません。対面で交流ができない、飲食が難しいなどの時期がありましたが、どのような取組や工夫をされましたか？

中止とはせず人数を制限して行いました。外国人のほうが、外出の抵抗感が大きかったです。外出できないから体が凝り固まり、リラックスできていないのではと考え、ストレッチ体操の講座や、子どもや家庭の様子を聞くようなフリートークの時間を作り、オンラインで交流の時間を作りました。参加できなかった人にはLINEなどで連絡しました。オミクロン株の感染拡大で学級閉鎖や休園が相次ぎましたが、外国の方は、その情報が自分達に入っていないと思っているようで、「近所の幼稚園が静かだが休園か？」などの問い合わせがきました。同じ地域に住む者として、情報を集め伝えていました。



福德

外国につながる高齢者に対してはZoomで、子どもにはZoom、手紙、電話などでボランティアが接点を作っています。（2021年から）ポエムは会食などの制限がされています。子どもには弁当を持ち帰らせていますが、皆で食べるから美味しいということで不評です。感染拡大状況を読んで、5月にはバスハイクをしました。他にも対面で話すことが大事だと思いい三密を避けて話せる場を設けていますが、参加者は少ないです。



中



石井

当たり前になっていたことが当たり前じゃなくなったことで、自分たちのやってきたことの価値を再確認できました。そう考えるとポジティブな時間だったと思います。飲食では個包装になりジュースはダメとなると、滞在時間が短くなります。カフェをされていて、飲み物があることでほぐれます。飲み物がなくなったことで、ディープな付き合いが薄れた、というこ



石井

とが再発見できました。また子ども達はこの3年間、学校での修学旅行も遠足もなく思い出がありません。思い出は生きる上での糧です。昨年、飲食なしでクリスマスパーティーをやり大盛り上がりだったのですが、それは子どもたちが思い出を作ろうとしていたからです。過去になく主体的に運営していて、コロナで辛い思いをしていたからだと感じました。スタッフが子どもやボランティアとやり取りする中で、何に気づくかが大事な観点です。

コロナで大打撃を受けたのは、大学2年生の世代で、友人関係を作れず心を病む子どももいました。外国につながる子どもの支援教室も試行錯誤し孤立させないことを大事にしました。また、活動を継続する大切さも学びました。



林田

◇参加者が居心地よく過ごせる居場所にはどのようなことばや関係性があるのか、報告やディスカッションを通して確認しシンポジウムを終了しました。

● YOKE より「よこはま日本語学習支援センター」の紹介

「横浜×日本語×多文化共生」を理念に掲げ、情報冊子の発行、地域の日本語教室のデータベース運営、相談対応、事業実施などを行っています。

地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業
よこはま日本語学習支援センター

よこはま日本語学習支援センター
Yokohama NIHONGO Support Center
<https://yokohama-nihongo.com/>

よこはまにほんごをべんきょうする

【役割1】
地域日本語教育の総合的な体制づくりを進める基盤となる拠点
【役割2】
外国人住民の日本語習得支援のための拠点

「にほんごコミュニケーション」
(情報冊子)

横浜×日本語×多文化共生
横浜の地域特性を踏まえた日本語学習支援を通じ、
多文化共生のまちづくりを推進します

日本語・学習支援 教室
データベース (横浜)

交流タイム

参加者の皆さんが知り合い、感想を共有する時間として、小グループでの交流タイムを設けました。

参加者の声

※アンケートより一部抜粋

(Q) 第一部シンポジウム全体の内容について、感じたこと、印象に残ったこと

- ・横浜市は外国人住民の人口も多いこともあるが、様々な活動拠点があり、活気があることが素晴らしいと思った。
- ・それぞれ異なった場所でご活躍されているが、居場所や子どもの存在において共通点があることが印象に残った。
- ・人との関わりを大切にする、役割のシャッフル、孤立させないなど明確なポイントがよく分かった。
- ・「イベントに参加しない自由、傍観する自由も大切」という言葉が印象に残った。
- ・地域、福祉、教育、それぞれの得意分野があるので、得意な人と繋がりながら活動をしていきたい。
- ・居場所があることで支援をする側も自由になれる、社会的なつながりを持てるという点はボランティア活動で非常に重要なことだと感じた。
- ・居場所から地域への展開ということが印象的でした。
- ・どういう点に着目しここまで持ってこられたのかの経緯やスタート時点での苦労話も聞いてみたかった。
- ・口の重い学習者さんのことを、単に「口が重い」と表現していたが、その奥には第二言語不安があったのだと、今日改めて気付いた。

(Q) 交流タイムの感想

- ・実際に横浜で支援者として動いている人の話を聞いたり、地方に住んでいる方の日本語支援の現状を聞いて横のつながりを感じた。
- ・それぞれの方が何かしら動いていて、壁にぶつかっているのだと分かった。
- ・オンライン交流会での工夫（同じスイーツを前日までに配達等で手に入れ、同じ時間に食べながら交流）を紹介したところ、興味を持っていただき良かった。
- ・もっと皆さんと交流がしたかった。

(Q) 意見、要望、登壇者へのメッセージなど

- ・第1, 第2の場所が、居場所としての機能を果たせず、第3の場所を求めている方が多いという事実は、ちょっと残念。日本人を含め、第3の居場所というものを、もっと、地域の中へ広めていく必要性を強く感じた。
- ・日本語を教えるということが、このような活動の底辺として役立っているということを知った。目からうろこの発見だった。
- ・日本語教室ボランティアに参加していたが、コロナ禍で介護や家事にかかりっきりの生活になり、活動から離れている。息抜きにでもなればという気持ちで参加したが、勉強にもなったし元気をもらえた。

- ・横浜といっても広いので、交流の場を広げて行く拠点を今まで以上に作って行く事が必要ではないか？
様々な共生が個々には進められているが、スポット的では無く有機的に結び付け年に何回か協働開催のような大きなシステム作りをしていきたいものだ。
- ・居場所・学習・隣に住む人を地域に誘い込む取り組みとして世代や地域を横断した取り組みに新しい視点を感じた。